

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：41605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520091

研究課題名(和文) 入宋僧の精神世界に関する文献学および宗教学的研究

研究課題名(英文) On the Japanese Zen Master to visit to Song China and Their Inner world in Perspective of Religious Studies

研究代表者

何 燕生 (He, Yansheng)

郡山女子大学短期大学部・文化学科・教授

研究者番号：00292186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)： 栄西や道元、円爾などの入宋僧の精神世界について、実地調査に基づきながら、文献学および宗教学の視点から再検討し、中世宗教研究の新たな展開を図ろうとした。具体的には、まず入宋僧たちが当時訪れたとされている現在中国の杭州や寧波、天台山、普陀山などの地域の寺院におけるそれぞれの足跡を実際に調査し、経済成長と宗教復興が進む近年において、それらの遺跡が一体どのような現状におかれているかを確認した。次はそれらに対する分析を踏まえつつ、歴史的、宗教的コンテキストに即して総合的な理解を試みようとした。さらには、仏教学や日本思想史などの諸分野による関連研究とも連携し、可能な限り学際的に検討することを目指した。

研究成果の概要(英文)： Generally speaking, the formation of a religious person's thought is intimately tied to his life experiences. If we are going to investigate the thought of a religious person from an academic standpoint then we must examine how experiences in his life came to shape his thinking.

In Part I of this Research systematically examines Eisai Enni and Dogen's life experience, Their achievements before Their pilgrimage to China, the process of Their seeking enlightenment after Their pilgrimage, the time of Their return to Japan, and Their activities after returning. All of this is based on Zen Minks' extant biographies and what has been said about Their life, including the events of Their time, events prior to his pilgrimage to China, the pilgrimage itself, and the times and events of Japan after their return. Generally speaking, any account of someone who is credited with founding a sect is bound to contain an element of myth. Over time new items and content are added to these biographies.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：入宋禅僧 禅体験 僧伝 栄西 円爾 道元

1. 研究開始当初の背景

入宋僧の精神世界にはきわめて多様な要素が含まれ、仏教的世界観や人生観の他に、中国の道教的な救済観や日本在来の神観念も多分に混じり合っており、決して単純なものではなかった。しかしながら、これまでの研究では基本的にそれぞれの思想や教義の側面に着目され、日本仏教史という枠組みからの考察が中心であり、しかも、研究の手法も文献の蒐集とその解釈という極めて限定されたものだった。本研究計画のように、実地調査およびそれを踏まえた歴史的分析の中から入宋僧の精神世界の全体像を探ろうとするような研究はこれまで本格的になされてこなかったように思われる。

そうした中、本研究計画に比較的近いものを挙げるならば、駒澤大学によって進められてきている「中国禅宗史跡調査」になろう。この調査は現在も継続中だが、基本的に一部の有志者によって進められており、しかも対象地域は広く、中国禅宗流布の各地に及んでいる。当該調査の成果の発表はまだ確認されていないが、実地調査を通じて、現状を確認するというその研究手法は本計画に有益な示唆を提供しているのである。

そして、平成21年度で終了した特定領域「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」(領域代表：小島毅)では、「仏道交渉班」が組織され、入宋僧をも視野に入れた研究計画が遂行されている。実地調査をも試みるという問題意識が本研究計画とは共有するものであり、当該領域の構成メンバーであり、本研究計画の連携研究者でもある末木文美士によって受け継がれ、さらに深まっていくことになる。

さらに、平成19年度で終了した基盤研究(C)「起請文を素材とする思想史研究の新たな領域と方法の開拓」(研究代表：佐藤弘夫)では「起請文」が持つ思想的、宗教的、

文化的コンテクストの解明と方法論の構築が研究の目的に据えられており、これまで優れた文献学的な成果があげられている。研究の手法や問題関心が本計画と共有されるのであり、その成果の多くは本研究計画の連携研究者でもある佐藤弘夫によって引き継がれていくことになる。

如上のように、実地調査に基づいた入宋僧の精神世界に関する研究は近年になってから、ようやくその必要性和重要性が認識されるようになっただけであり、本格的にはなされていない、というのが現状であると認められよう。

入唐僧・入宋僧を扱った共同研究などが試みられてきており、多くの文献学的な成果があげられている。入宋僧の精神世界の解明という本研究計画とも問題関心を共有し、強力な協力関係が構築されることが期待できると言える。

応募者はこれまで道元を中心に、現存する文献を通じて、入宋禅僧の思想的研究を行ってきた。本研究計画はそうした流れを受け、すでに5年間の準備期間を経ている。もとは応募者が研究代表として採択された萌芽研究「鎌倉時代における中国禅思想の受容とその展開」(平成14年～15年)に始まった。文献蒐集とテキストの解読という二つの研究を柱とする当該研究では、具体的に「渡来僧」が扱われ、その成果が「渡来僧の精神世界」 「禅における花のシンボリズム—「拈華微笑」という話をめぐって」(日本佛教学会平成14年度学術大会で発表、論文は『日本佛教学会年報』68号に掲載。後に『仏教と自然』再録、平楽寺書店、2003年)などの論文に結実している。その後、上海・復旦大学「国家社会科学創新基地985プロジェクト」の公募研究に応募し、「文化交錯史」班で「中日仏教交流史上的道元」(平成18年～20年)という研究計画が採択され、研究代表をつと

めた。当該研究計画の成果は近く中国語で上海古籍出版社から刊行される予定である。そして、平成 20 年度に、基盤(C)「『正法眼蔵』思想の宗教学的的研究」が申請・採択され、現在は進行中であるが、研究の手法は先の萌芽研究や復旦大学により採択された研究課題と同様、主として文献学的考察である。しかし、それらを通じて、文献学的考察と共に、実地調査も必要であることを痛感させられた。資金不足のため、実施できなかったが、平成 20 年度に、財団法人三菱財団から助成金を受け、初歩的な実地調査を試みることができた。しかし、その過程で、本格的な実地調査をもっと実施する必要性を強く認識させられた。連携研究者らによる研究からの刺激とアドバイスを受け、また現地の協力者や協力機関と協議した結果、本研究計画が着想されるに至ったのである。

入宋僧は日本と中国という二つの文化の体験者であり、中世の日本仏教の中でも特異な存在だったと言える。したがって、彼らの精神世界を明らかにするためには、単に文献上だけでは不十分であり、文献と共に、彼らがかつて訪ねた諸寺院を実地調査することが必要だが、本計画はそれを可能にすることができるという点で、極めて重要な試みだと考える。

2. 研究の目的

この研究計画は、栄西や道元、円爾などの入宋僧の精神世界について、実地調査に基づきながら、文献学および宗教学的の視点から再検討し、中世宗教研究の新たな展開を図ることを目的とする。第一に入宋僧たちが当時訪ねたとされている現在中国の杭州や寧波、天台山、普陀山などの地域の寺院におけるそれぞれの足跡を実際に調査し、経済成長と宗教復興が進む近年において、それらの遺跡が一体どのような現状におかれているかを確認すること、第二にそれらに対する分析を踏ま

えつつ、歴史的、宗教的コンテキストに即して総合的な理解を試みるというものである。

如上の研究の目的達成のために、本研究は仏教学や日本思想史などの諸分野による関連研究とも連携し、現地の協力者の支援を得ながら、可能な限り学際的に検討することを目指している。

3. 研究の方法

本研究の方法は、具体的には文献調査と実地調査の両方を行ってきた。文献調査については、北京、上海、杭州、寧波などの図書館や寺院に所蔵されている関連文献の蒐集につとめ、文献学的考察を実施した。この作業を通じて、中国側の資料から新しい視点を発見するための可能性を模索しようとした。文献目録の作成も予定している。

実地調査については、入宋僧らがかつて訪ねたことがある諸寺院の現状について実地調査を行った。この作業を通じて、それぞれの現状を確認すると共に、それらを用いた歴史的考察を行うことを目的とした。それらを踏まえ、これからは写真や映像メディアの保存および分析も行う予定である。

以上のような文献調査および実地調査を通じて、日本宗教史における「入宋僧」の精神世界に見られる多面的な要素を解明することを目指している。

4. 研究成果

(1).平成 23 年 6 月に助成金の交付を受けて、「研究計画」に従い、まずは中国への調査旅行を行った。これまでの研究によると、入宋僧の宋に対する問題関心はおおよそ二つに大別でき、すなわち一つ目は仏教典籍の獲得、仏教教義に関する難問の解決、修行方法の習得であり、二つ目は寺院集団システムの導入だったという。今回はそのような見方を踏まえつつ、一方では入宋が当時実際に滞在していた禅宗寺院における文献調査を実

施し、他方ではいくつかの地方図書館において、宋史における入宋僧の記録や当時中国の文人たちとの交流に関する諸文献について具体的に調査した。これらの調査活動は、いずれも現地の協力者の協力を得て遂行したのである。そして次は国内における関係学会や研究会、シンポジウムなどに参加して、当該研究に関する資料の収集と最新の研究動向の把握につとめた。

以上の研究活動を踏まえ、その成果の一部を国際シンポジウムで相次いで発表した。一つ目は平成 23 年 10 月下旬に禅宗の発祥地でもある中国湖北省黄梅県で開催された「第二回禅宗文化高峰论坛」で「拈華微笑的思想史」と題する論文であり、これは基調講演という形で発表したものだが、「拈華微笑」に対する中日の禅僧の理解について比較検討し、その思想史的意義を探った。二つ目は平成 24 年 3 月下旬に国立台湾大学で開催された「東亜儒佛会通与争辯国際學術研討会」で「12-13 世紀東亜禅宗与儒教」と題する論文であり、道元の著述に見られる三教一致説批判の言説を手がかりに、その歴史的背景などについて考察した。

震災を体験し、しかも原発事故の影響を受ける中での研究実施ではあったが、当初の予定通りの文献調査とそれに関する研究成果の発表ができたことはとても大きな意義を持つものとする。

(2). 平成 24 年度は、前年度の実施状況を踏まえながら、まずは国内における文献調査と寺院調査を実施した。入宋僧がかつて生活していた京都およびその周辺の寺院は現在大半、観光寺院化され、つまり中高生の修学旅行先と指定されているのである。そうした中、入宋僧たちは或いは伝説上の人物となったり、或いは史実として語られたりするという現状を確認した。

次は前年度と同様、中国における関連寺院での調査を実施した。入宋僧たちが実際に学

んでいた江南地域の禅宗寺院で現状を調査したほか、道元の曹洞禅の成立に大きな影響を与えたとされる北宋時代の芙蓉道楷禅師の道場だった大洪山での実地調査を行った。現在は「慈恩寺」という寺名で復興されており、2013 年秋にすべての工事が完成される予定だそうで、その工事現場を実際に視察した。日本には「芙蓉道楷禅師のお袈裟」とされるものがいくつか残されており、それらについての確認調査も今後必要になってくるであろう。また、中国版の「社会参加仏教」とも言える「生活禅」の提唱者である浄慧法師を黄梅県にある四祖寺や五祖寺において訪問し、「生活禅」の理念とその実践についても確認した。現代における禅の新しい受容という新たな研究課題を得る結果となり、これも大きな収穫だと言えよう。

さらには前年と同様、国内外における学会、研究会やシンポジウムにも積極的に参加したり発表したりし、意見交換や情報の収集につとめた。国内外の研究者たちと交流することはとても意義のあることであり、今後の研究の進展に寄与するものが大きいであろう。

(3). 最終年度にあたる平成 25 年度は、主として研究成果の発表に力を入れてきた。まずは 5 月に、中国河北省社会科学院哲学研究所と河北省仏教協会の共催による「河北禅宗文化フォーラム」に参加し、本研究の成果の一部を発表した。また、10 月に、台湾政治大学と法鼓山中華仏学研究所の共催による「漢伝仏教の超文化交流国際シンポジウム」、そして 11 月に、中国黄梅禅文化研究会主催による「黄梅禅宗文化フォーラム」にそれぞれ参加し、研究成果を発表してきた。

次は実地調査については、まず日本国内では、4 月に中世仏教と深い関わりを持つ東北地方にある山寺、中尊寺などへ出かけ、実地調査を行った。そして 10 月に青森県下北半島にある恐山を実地調査した。これらの寺院はいずれも入唐僧あるいは入宋僧と関わっ

ているとされており、その現状を調査したのである。国外では7月に河北省柏林寺主催の「生活禅サマーキャンプ」に参加した。また、たまたま今年度は生活禅が提唱されてから20周年に当たる節目の年であるため、ついでにその記念行事にも参加した。そして11月に北京や武漢へ出かけ、関係の大学や研究機関にて文献調査を実施した。

以上のような研究活動を通して、いくつかの成果を得ることが出来た。研究成果が思うまま発表できたことは何よりの成果だったが、日本の東北地方における調査を通して、これまであまり注目されてこなかった東北仏教と宋との関わりが明らかとなり、今後の研究の進展に大きな手がかりを得ることが出来たという点である。さらに、現代中国における「生活禅」についてその活動の一端を実際に知ることが出来、これも今後の研究の進展に寄与することが大きいと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

何燕生、拈華微笑的思想史、第二回黄梅禅宗文化高峰论坛論文集、黄梅禅宗文化論壇組織委員会、査読無し、1巻、2011年、282-287頁。

何燕生、12-12世紀東亜禅宗与儒教、2012東亜儒佛会通与争辯国際学術会議論文集、国立台湾大学人文社高等研究院、査読無し、1巻、2012年、125-140頁。

何燕生、拈華微笑的思想史、中国禅学研究、上巻、再録、査読無し、16-28頁。

何燕生、日本語訳『生活禅のすすめ』出版、中外日報、2013年2月19日付、査読無し。第4面。

何燕生、20世紀60年代的初期禅宗研究 以印順法師的『中国禅宗史』為問題的討論、第三回黄梅禅宗文化高峰论坛論文集、下巻、査読有り、2012年、366-375頁。

何燕生、道元对宏智正覚的理解 中日曹洞宗交流の一側面、漢伝仏教的跨文化交流国際学術研討会論文集、1巻、査読有り、2013年、1-15頁。

何燕生、道元生平考、中国禅学、7巻、査読有り、2014年、査読有り、443-461頁。

〔学会発表〕(計 4 件)

— 何燕生、拈華微笑的思想史、第二回黄梅禅宗文化高峰论坛論、2011年10月、中国湖北省黄梅県。

— 何燕生、12-12世紀東亜禅宗与儒教、2012東亜儒佛会通与争辯国際学術会議、国立台湾大学人文社高等研院、2012年3月、国立台湾大学。

— 何燕生、20世紀60年代的初期禅宗研究 以印順法師的『中国禅宗史』為問題的討論、第三回黄梅禅宗文化高峰论坛、2012年12月、中国湖北省黄梅県。

— 何燕生、道元对宏智正覚的理解 中日曹洞宗交流の一側面、漢伝仏教的跨文化交流国際学術研討会、2013年3月、国立台湾大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

何 燕生 (HE, YANSHENG)

郡山女子大学短期大学部・文化学科・教授
研究者番号：0292186

(2) 連携研究者

1. 末木文美士 (SUEKI, FUMISHIKO)

研究者番号：90114511

国際日本文化研究センター教授

2. 佐藤弘夫 (SATO, HIROO)

研究者番号：30125570

東北大学教授・文学研究科・教授

3. 池上良正 (IKEGAMI, YOSHIMASA)

研究者番号：60122925

駒澤大学・文学部・教授